

編 集 後 記

『早稲田大学図書館紀要』五七号を「生誕一五〇年記念・市島春城特集」号としてお届けする。

早稲田大学、特に図書館で働くものにとつては、市島春城（謙吉）という名前にはそれなりになじみがある（はずである）。ただ、巷間、彼の名やその業績を知る人は多くは無いだろう。早稲田大学（東京専門学校）草創期の功労者、大隈重信はもとより、小野梓、高田早苗などと比べても、その知名度は低い。しかし春城は現在の早稲田大学、とりわけ図書館の基礎を築いた人物であり、彼なくして現在の早稲田大学図書館はなかったといつても過言ではない。それほどの人物が、今回の特集をこー読いただければ、その言葉が誇張とも言い切れないことをご理解いただけるのではないだろうか。

今回の特集は、春城の関係者からお寄せいただいた原稿と、これまで二十年以上にわたる、「春城日誌」を本誌に連載してくださった春城日誌研究会のみなさんの原稿を中心に構成している。森氏が継承する市嶋宗家からは、近年も多大なご支援を大学に對し賜っており、また市島氏は春城の家、角市市島家をご兄弟で守り、盛りたててくださっている。さらに旗野氏は春城の生地阿賀野市にあつて、春城会の中心としてその顕彰につとめている。

今回のご寄稿とあわせ、改めて御礼申し上げたい。一方、春城の図書館長時代の日記を読み通すことを目標に始まった春城日誌研究会だが、今回の連載でついにその区切りの時を迎えた。限られた時間の中で、特に現役の館員だった頃には昼休みなどの短い時間の積み重ねが、今、大きな成果を生み出した。同じ図書館員として、また一時その会に籍を置いた者として、尊敬と感謝の念を表したい。

市島館長の時代から百年が過ぎ、図書館の建物も周辺の環境もずいぶん変わった。収集する資料についても、図書予算の半ば近くを電子媒体（電子ジャーナル、電子ブック、など）が占めるようになり、ほとんどの資料がオンライン目録（WINE）で検索できるようになった。そうした時代だからこそ、早稲田大学にしかないと言える蔵書の構築と、それら特色あるコレクションについて、図書館員の視点での積極的な情報発信が求められる。春城の遺した「深蔵如虚」という言葉を今の我々が実現するためにはどのような工夫が必要か、図書館員自身の力量が問われている。

生誕一五〇年にあたり、大学では春城の銅像を図書館に設置することとした。学内にはすでに大隈重信、小野梓、高田早苗、坪内逍遙らの銅像がある。総合学術情報センター（中央図書館）中庭には、かつてこの地にあった野球場の名残として安部磯雄、飛田穂洲の

銅像もある。しかし、図書館にとってもっとも大事な人物である春城の像は無く、これまでも春城像の設置を望む声もあったが実現できずにいた。今回、春城の遠戚にあたる旗野裕之氏はじめ、多くの方のご協力もあつてついに春城像が総合学術情報センター二階に設置され、日々図書館を訪れる人々を迎え、見守ってくれることとなった。（表紙参照）また、その眼差しは同時に我々図書館員の働きぶりを、叱咤激励してくれるものでもある。偉大な先人の志をうけつぐ者として、その思いに応えるべく、緊張の日々がはじまったとも言える。（藤原記）

図書館紀要編集委員会
藤原秀之（資料管理課長）
久保尾俊郎（資料管理課）
鹿角もえぎ（資料管理課）

早稲田大学図書館紀要 第57号

二〇一〇年三月十五日 発行

編 集 早稲田大学図書館紀要

編集委員会

発行人 中 元 誠

印刷所 三美印刷株式会社
発行所 早稲田大学図書館

東京都新宿区西早稲田一ノ六ノ一
〇三（三三〇三）四一四一